

沖縄アイデンティティとは何か

～そのⅡ：過去と未来～

林 泉忠 (琉球大学)
lim@ll.u-ryukyu.ac.jp

第1部 「近代」と沖縄アイデンティティの始動

I. 社会的普遍性をもつアイデンティティはいつ始まったか？

1. 歴史主義の視点
2. 近代主義の視点

II. 沖縄民衆の「日本人」意識は近代から

1. 併合前に「日本人」意識は存在しなかったか？
2. 併合後の日本化教育の成果

III. 「ウチナーンチュ」意識も近代から？

1. 近代以前「琉球アイデンティティ」は存在しなかったか？
●「琉球三十六島」の記述など ⇒「琉球」意識の存在
2. 併合による琉球の一体化の効果

IV. 「近代」の衝撃と近代沖縄地位の変遷

1. 琉球国の滅亡と「大日本帝国沖縄県」の誕生
2. 帰属の変更の繰り返し：琉球国⇒沖縄県（Ⅰ）⇒琉球（米国）⇒沖縄県（Ⅱ）
3. 近代史＝沖縄住民のアイデンティティの葛藤史

第2部 「徘徊」する沖縄アイデンティティの近現代史

I. 最初の「沖縄ナショナリズム」：琉球復国運動

1. 時代：琉球併合（1879）～19世紀末まで
2. アイデンティティの流れ：沖縄（琉球）アイデンティティが形成・主流に
⇒最初の琉球・沖縄ナショナリズムの波
3. 沖縄社会の動向：
①「主流抵抗派」（「頑固党」）
ア）「大和支配」への抵抗 イ）復国運動（「脱清運動」・「救国運動」） ウ）「公同会運動」
②「非主流妥協派」（「開化党」） ◎現実主義の立場から「大和支配」に協力

II. 最初の「日本ナショナリズム」：下からの「日本同化」運動

1. 時代：19世紀末～1945
2. 背景：日清戦争における中国（清）の敗北と「公同会運動」の失敗
3. アイデンティティの流れ：最初の日本ナショナリズムの波
4. 沖縄社会の動向：「下から」の日本への同化運動
ア）太田朝敷の「くしゃみまで日本化論」
イ）伊波普猷の「日琉同祖論」「奴隷解放論」

III. 2度目の沖縄ナショナリズム：戦後初期の離日風潮・独立論

1. 時期：戦後初期（1945-1949）
2. 背景：日本からの分離、米国による占領
3. アイデンティティの流れ：2度目の沖縄ナショナリズムの波
4. 沖縄社会の動向：諸政党の独立論への傾斜

IV. 2度目の日本ナショナリズム：復帰運動

1. 時代：1950～60年代
2. 背景：米国による占領・支配の長期化
3. アイデンティティの流れ：2度目の日本ナショナリズムの波
4. 沖縄社会の動向：革新エリートを中心とした復帰運動の高揚

V. 3度目の沖縄ナショナリズム？：「反復帰」の動き

1. 時代：日本復帰前後（1969～1973頃）
2. 背景：「本土並み」なしの「祖国復帰」
3. アイデンティティの流れ：3度目の沖縄ナショナリズムの波？
4. 沖縄社会の動向：①「復帰反省論」、②「復帰尚早論」、③独立論

VI. 歴史からみた沖縄アイデンティティの特徴

1. 二つのアイデンティティの間で ⇒躊躇・徘徊・揺れる
2. 歴史から見た反復性：沖縄ナショナリズムの波と日本ナショナリズムの波の反覆の繰り返し

VII. なぜ「徘徊」するか

1. 構造的要因：「近代」～「中心」と「辺境」関係の近代における変容 ⇒「脱辺境化」
2. 歴史的要因：「帰属変更」の経験～主権・帰属の変更の繰り返し
3. 思想的要因：「同化主義」と「反同化主義」の並存～客観的史観／沖縄主体の史観の形成は不可能か
4. 「復帰」の矛盾：①「祖国」を求める「復帰」と住民不在の「復帰」
②「復帰」後の「中心」優先政策

第3部 展望・沖縄アイデンティティの行方

I. 復帰後の模索Ⅰ：自治論の表れ

1. 時代：復帰前後～1980年代
2. 背景：日本との一体化の進展、基地の恒常化
3. アイデンティティの流れ：日本ナショナリズムの定着・沖縄ナショナリズムの底流化と時々の躍動
4. 沖縄社会の動向：社会的分化 ⇒①現状の容認・維持、②沖縄主体性の模索（自立論・自治論）

II. 復帰後の模索Ⅱ：自立意識の主流化

1. 時代：1990年代～現在
2. 背景：大田県政の誕生・1995年少女暴行事件
3. アイデンティティの動き：「沖縄自立」の主流化 ⇒4度目の沖縄ナショナリズムの波？
4. 沖縄社会の動向：①官民一致の沖縄自立運動 ②沖縄自治研究会、など

III. 沖縄アイデンティティの静的部分

1. 複合的アイデンティティの定着
2. 独立否定派は大多数で肯定派は少数で落ち着く
3. 前提：沖縄地位は今後も変更されない

IV. 沖縄アイデンティティの動的部分

1. 不安材料：政府への高い不満
2. 三つの変数：基地問題、本土との経済的格差、歴史認識

IV. 再考：「道州制」調査からみた沖縄アイデンティティの性格

1. 「独自の州が望ましい」が過半数：「日本と距離を置きたいが離脱しない」を反映
2. 「九州と一緒にしてほしい」は 35.7%：経済自立に自信欠如、「日本」を離れるのが怖い

【参考図表】 出所： 林泉忠・琉球大学「沖縄住民のアイデンティティ調査2005-2007」の結果に基づく。対象は18歳以上の沖縄住民
有効回答数は1029（2005年）、1200（2006年）、1201（2007年）。ご引用の場合、調査者などの明記をお願いします。

表1 沖縄の若者のアイデンティティ構造

	若い年齢層（18～25才）			全年齢層（18才～）平均		
	2005年11月	2006年11月	2007年11月	2005年11月	2006年11月	2007年11月
沖縄人	38.6%	20.4%	28.0%	40.6%	30.3%	41.6%
日本人	11.4%	22.2%	23.7%	21.3%	28.6%	25.5%
沖縄人で日本人	50.0%	57.4%	45.2%	36.5%	40.1%	29.7%
その他	0.0%	0.0%	1.5%	1.1%	0.8%	2.1%
分からない／難しい	0.0%	0.0%	1.6%	0.5%	0.3%	1.1%

質問：ご自身のことを沖縄人だと思いますか、それとも日本人だと思いますか？または、沖縄人でも日本人でもあると思いますか？

表2 「沖縄独立」の是非をめぐる若い年齢層の見方

	若い年齢層（18～25才）			全年齢層（18才～）平均		
	2005年11月	2006年11月	2007年11月	2005年11月	2006年11月	2007年11月
独立すべき	28.4%	22.2%	14.3%	24.9%	23.9%	20.6%
独立すべきではない	61.4%	77.8%	75.2%	58.7%	65.4%	64.7%
沖縄住民が決めるべき	2.3%	0.0%	1.6%	2.8%	1.7%	0.8%
その他	1.1%	0.0%	0.0%	2.5%	0.8%	1.3%
分からない／難しい	6.8%	0.0%	8.9%	11.1%	8.3%	12.7%

質問：もし日本政府が沖縄住民に沖縄の将来を自由に決めることを認めた場合に、沖縄は独立すべきと思いますか？

表3 日本政府の沖縄に対する姿勢は友好的？（2007年）

友好的	15.3%
どちらかというとな友好的	6.7%
どちらとも言えない	15.3%
どちらかというとな友好的ではない	10.9%
友好的ではない	43.8%
その他	0.8%
分からない	7.2%

質問：政府は沖縄に対する姿勢は友好的だと思いますか？友好的ではないと思いますか？

表4 政府の沖縄政策に満足している？（2007年）

満足している	9.9%
どちらかというとな満足している	8.0%
どちらとも言えない	8.5%
どちらかというとな満足していない	11.8%
満足していない	56.5%
その他	0.4%
分からない	4.9%

質問：日本政府の沖縄政策について全体的に満足していますか？

表5 道州制の是非：単独の州か九州と一緒にするか（2007年）

沖縄だけで州とする	52.1%
九州と一緒にするか	35.7%
その他	2.1%
分からない	10.1%

質問：日本を10個程度の州にする道州制が議論されています。沖縄の将来について望ましいのはどれですか？

表6 基地・経済・歴史問題が県民の遠心力への影響（2007年）

	A. 沖縄人意識が高まる要因	B. 「沖縄独立」が増える要因
基地問題が悪化した場合	30.0%	31.0%
本土との経済的格差がさらに広がった場合	25.5%	24.4%
「集団自決」などの歴史観（歴史認識）が 日本政府とく違った場合	38.9%	30.1%
沖縄人意識が強くなることはない	0.7%	4.3%
その他	1.1%	2.4%
分からない／難しい	3.7%	7.9%

質問A. 沖縄人意識が（さらに）高まるのは、次のうちどういう場合だと思いますか？

B. 沖縄の独立を支持する人が増えるのは、次のうちどういう場合だと思いますか？

表7 県民の日本人意識が高まる要因（2007年）

基地問題が解決した場合	29.4%
本土との経済的格差が解消された場合	31.5%
「集団自決」などの歴史観（歴史認識）が 日本政府と一致した場合	28.0%
日本人意識が強くなることはない	2.1%
その他	2.3%
分からない／難しい	6.9%

質問：沖縄住民の日本人意識がさらに高まるのは、次のうちどういう場合だと思いますか？

〔講師（林泉忠）の関連文献〕

1. 単著『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス——沖縄・台湾・香港』明石書店、2005年2月28日。
2. 共著『やわらかい南の学と思想—琉球大学の知への誘い』担当部分：「沖縄アイデンティティの読み方：県民の帰属意識の調査から」（沖縄タイムス出版社、2008年4月、106-123頁）。
3. 『「辺境東アジア」——新たな地域概念の構築』『国際政治』第135号、日本国際政治学会、2004年、133-152頁。
4. 「沖縄アイデンティティの十字路——「祖国復帰」と「反復帰」のイデオロギー的特徴を中心に」『政策科学・国際関係論集』第6号、琉球大学法文学部、2004年、35-66頁。
5. 『「琉球抗日復国運動」再考——時期区分と歴史的位置付けを中心に』『政策科学・国際関係論集』第6号、琉球大学法文学部、2003年、59-115頁。
6. 「戦後初期沖縄諸政党の独立論——失敗した民族主体性回復の試み」『沖縄関係学研究論集』第4号、1998年8月、63-76頁。
7. 「沖縄アイデンティティのゆくえ」(1)(2)(3)(4)『沖縄タイムス』2008年1月7-10日。
8. 『「辺境東アジア」——躍動するアイデンティティ——』元旦特集号、(1)(2)(3)(4)『沖縄タイムス』2006年1月1、4-5、9-10日。
9. 「徘徊する沖縄アイデンティティ」(1)(2)(3)(4)(5)『琉球新報』2005年5月10-12日、14日、16日。
10. 「5.15 アジアから考える」(上)(下)『沖縄タイムス』2005年5月16日-17日。
11. 「沖縄人アイデンティティ——比較の視点から」(1)(2)(3)(4)『沖縄タイムス』2004年7月5-8日。